



営農NEWS



水稻育苗の準備にあたって注意すること

日本気象協会による水戸市での桜の開花予想（3月7日発表）では、昨年より1日早く、平年より13日早い、3月20日頃と見込まれています。

これからは日に日に春にむかい、水稻の育苗や田植えの準備などを始める時期となりますが、昔から「苗半作」と言われ、水稻苗の良し悪しが、良好な生育や収量に大きく影響するとされていますので、生育が揃い、田植後の活着が良好で、病害虫に侵されていない良苗づくりを目指して、まずは育苗の準備作業を進めてください。

1 資材などの準備

育苗ハウスの清掃や補修、種子、培土、育苗箱（ケミクロンGやイチバンで消毒）、保温資材（太陽シート等）、バケツや桶、催芽器や播種機など、育苗に使用するものがそろっているか、動作の確認や調整もしておきましょう。

2 種子消毒と浸種

水稻種子は毎年更新するのが基本です。JA等から購入した薬剤吹付種子は、種子殺菌剤（対象病害：ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）と殺虫剤（対象害虫：イネシンガレセンチュウ）が吹付け処理されていますので、そのまま浸種作業に入ります。

日	1 2 3 日	4 ~ 12 日		
	種子消毒のための浸種	催芽のための浸種	催芽	播種
作業の内容	種籾 1kg に水約 4ℓ 3 日間は水の交換をしない	水の交換を適時、 静かに行う	28～30℃で 15～ 20 時間加温し、ハ ト胸程度にする	1 箱当り、催芽籾 で 170～230 g（乾 籾で 140～180 g） を目安にします
	この期間、水温は 10～15℃とし、水温積算温度（水温×日数） で 100～120℃（水温 10℃で 10～12 日間）を目安にします 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「ふくまる」では 120℃（水温 10℃で 12 日間または 15℃で 8 日間）、「ゆめひたち」では 110℃、その他の品 種（飼料用品種を除く）では 100℃が目安です			

注意 催芽のための浸種期間中は、1～2 日おきに水を交換しましょう。酸素の補給とともに、発芽阻害物質の除去などで重要です。また、ときどき種籾を攪拌することにより、水温や酸素吸収の均一化を図りましょう。

※未消毒種子の場合は、塩水選（うるち品種は比重 1.13）で籾を選別し、次のいずれかで種子消毒を行います。

1) 温湯消毒：「うるち品種」は、種子を 60℃に保った温湯に 10 分間浸漬処理し、処理後は水中で速やかに冷却します。なお、割れ籾が多い場合は、温湯消毒により発芽率の低下する危険性がありますので、避けてください。

2) 生物農薬（エコホープ、エコホープD、タフブロックなど）は、使用方法、使用時期などで適用病害が異なる場合があります。使用方法、注意点などを十分確認して、適切に処理します。

※なお、温湯消毒や微生物農薬での種子消毒は、それぞれの単独処理では効果が劣る場合があるため、これらを組み合わせた処理で効果を安定させます。

3) 化学農薬（モミガードC・DF[F:12と3とM1]またはテクリードCフロアブル[F:3とM1]などとスミチオン乳剤[I:1B]）の規定量液の中で種籾（袋）をゆすって薬液を均一に付着させます。長時間浸漬では、処理中に数回攪拌します。防除効果を安定させるため、水温は 10～15℃に保ち、処理後は水洗せず、浸種作業に入ります。

3 種子の催芽

28～30℃で 15～20 時間加温し、出芽を揃えるため必ずハト胸状態にします。

この処理中に 30℃を超える高温になると、もみ枯細菌病などの病害発生を助長しますので、

十分気をつけて温度の適正管理に努めて下さい。なお、ハウス内や良く日のあたる場所で管理すると、昼間に予想以上の高温になる場合がありますので、この場合も十分な注意が必要です。

4 育苗培土

JAの水稲用培土（いばらき培土、苗みどり JA水稲専用培土）を使用しましょう。

なお、育苗中における苗立枯病の予防として、ナエファイン粉剤[F:U17]やタチガレエースM粉剤[F:32と4]などを土壌混和処理、また、播種時などにナエファインフロアブル、タチガレエースM液剤、ダコレート水和剤[F:1とM5]などを土壌灌注処理すると、一部の病害発生を抑制します。なお、各薬剤の対象病害や使用時期などはそれぞれ異なりますので、必ず登録内容を確認してください。 ※上記に記載した農薬登録は令和3年3月8日現在です。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040